

夢もっとひろがれ

4

発行・編集
いぶき福祉会後援会

〒502-0907
岐阜市島新町5番9号
TEL. 058-233-7445
FAX. 058-232-9140
E-mail. ibuki@alto.ocn.ne.jp
(1部100円)



新年度を迎えました。

もくじ

- ② ③ いぶき成人と還暦を祝う会
- ④ ⑤ 第二いぶき成人を祝う会
- ⑥ 「シリーズ」私と息子といぶきといぶきを支える人
- ⑦ 見学会記録・後援会総会のご案内
- ⑧ ⑩ いぶき仲間のすがた
- ⑨ ⑫ 座談会・福祉の仕事とは
- ⑬ ⑭
- ⑮ 新人職員紹介
- ⑯ 情報掲示板・いぶきまつり告知

日に日に暖かさを感じるようになり、草花が一斉に芽吹き、春の訪れを感じます。いぶきには新しい仲間や職員が増え、新たな出会いによる心地よい緊張と期待にみんなが胸を膨らませています。いよいよ新年度が始まります。通信を通していぶきの生き生きとした様子を皆さんと共有したいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



2017
Spring
Vol.190

いぶき 仲間のすがた 成人と還暦を祝う会

今年度西部いぶきでは、4名が成人を迎え、1人が還暦を迎えました。成人は、サテライトの中村真也さん、あかねの本山恭康さん、大橋美布由さん、デイ



ジーの上松祥也さん。還暦は、星野朋子さんです。

1月14日(土)日光コミュニティセンターにて来賓の方々をお迎えし、成人・還暦を祝う会

が開催されました。

会が始まる前、控室にて仲間や家族の方々と、お世話になった先生方がまるで昨日の事のように思い出を語り合い、大きく立派に成長した姿を見て、涙を浮かべる場面もありました。

会が始まると、少し緊張した表情で会場に入りました。会場からは「おおー!」と声があがり、大きな拍手に迎えられました。生い立ちビデオがスクリーンに流れると、じつと見つめ、興味深く見ていました。楽しかったこと、辛かった事、友達や先生との思い出、家庭での生活…色々な思い出が蘇ってきたことでしょう。会場からは「かわいい!」と、たくさん声があがりました。ご家族の方も、時に笑い、涙をぬぐいながらご覧頂いていました。

次に、恩師の方々より

お祝いの言葉を頂きました。よく一緒に走りまわった!笑顔が素敵でした!など、学生時代のエピソードを織り交ぜながら仲間の姿を紹介して下さいました。普段、なかなか長時間座っていることが苦手な仲間も、先生方のお話しの途中は、しつかりと座って耳を傾けていました。今ここにいる仲間の姿は、ご家族や恩師の方々など、数えきれない方々の支えや思いがあつて、今があるのだなと感じました。

花束贈呈では、みなさん一人ひとりが感謝



の気持ちを込めて保護者の方へ花束をプレゼントしました。普段なかなか伝えることのできない「ありがとう」の言葉を、一生懸命伝え、少し照れくさそうにする仲間、言葉で伝えることの難しい仲間もしつかり目を見て花束を渡すなど思いを伝える方法は様々でも、その気持ちは変わらず、保護者の方々にしつかりと伝わりました。

保護者の方から会場みなさんへのご挨拶では「学生時代には苦労しましたが、この子がいたから頑張ることができました。今いぶきに入っ

ました。
 続いて還暦を祝う会に移りました。ゆめくるんで働く星野朋子さん。日々の活動の様子などを紹介するムービーが流れると、会場全体が笑顔になり、なごやかな雰囲気となりました。



て毎日頑張つて仕事ができる事、仲間と一緒に楽しく穏やかに過ごすことができ、本当に良かったです。これからもよろしく願います」と、色々なことを思い出しながらか挨拶頂きました。ご家族の方々の素敵な思い出やご苦勞を暖かい雰囲気にも包ま

た。楽しい仲間にも包まれて過ごす姿、みなさんの笑顔がとても印象的でした。その後の星野さんから、「こんな式を開いていただいて、ありがとうございます」と、緊張しながらも一生懸命挨拶をされました。

最後に、いぶきの自治会会長の樋口さんが「成人を迎えられた方々、還暦を迎えられた星野さん、おめでどうござい



ます。ご家族の方々のご苦勞もあつたと思います。いぶきには素敵な先輩がたくさんいるので、その先輩を見ながら、みんなと一緒に頑張つていきましよう」と、お祝いの言葉を述べられました。

成人・還暦を祝う会を開催するにあたり、私たちスタッフは色々な不安を抱えながら準備に取り組みしましたが、仲間の皆さん緊張しながらも堂々とした姿で役割を果たすことができ、良い意味で取り越し苦勞となりました。新成人としての自覚と成長を強く感じました。成人・還暦という人生の節目を法人全体でお祝いできた事を誇りに思いました。皆さま、本当におめでどうございます。今後ともみんなで一緒に笑顔あふれる毎日を過ごしていましよう。

きざしデザイン

加藤 裕一朗



第二いぶき 仲間のすがた 成人を祝う会

第二いぶきでは、今年度、二名の仲間が成人を迎えました。アトリエぽつへの矢川司さん、にじの藤掛紗那さんです。



1月14日(土)第二いぶきで来賓の方をお迎えし、成人を祝う会が開催されました。当日は、雪にもかかわらず恩師の先生方始め、ご家族、保護者の方々に出席していただきました。前日までは美山中央公民館を予定していましたが、大雪の予報が出ていた為、急きよ第二いぶきへと変更になりました。会場が変わったこと、残念な気持ちもあることながら、いつもと同じ場所である安心感と、新成人を皆で囲んでお祝いできる距離感で、アットホームで温かみのある式となりました。大きな拍手の中、少

し緊張した面持ちで新成人が入場してきました。矢川さんは、ピシッとスーツ姿が決まっています。みんなの前でも堂々と



大人らしく振舞っている姿は、とても頼もしく思えました。藤掛さんは、ピンクの袴で女性らしく、成人を迎えた嬉しさをニコニコと笑顔と笑い声



で表現してくれました。周りからは自然と、「カッコいい」や「かわいい」と声が聞こえ和やかな雰囲気が始まりました。生い立ちビデオでは、それぞれの二十年間を



写真で振り返りました。ビデオが始まると二人とも懐かしい写真に興味津々で見入っていました。生まれてから今までの成長を感慨深い

表情でご覧になるご家族の表情が印象的でした。



次に、お世話になった恩師の先生方より、お祝いの言葉を頂きました。神山先生からは「矢川さんは、お兄さん役で友達と仲良くでき、負けず嫌いで頑張りやさんだった。藤掛さんは、良く笑いやさしくて泣いてしまうこともある、心の優しい子だった」と紹介して下さいました。福井先生からは、クイズを交えて、矢川さんはダンスやエア

頂きました。
新成人の決意として、
矢川さんは「仕事のジャ



ギターが得意な事、藤
掛さんはバスケットボ
ールのシュートが得意
な事を紹介して下さい
ました。大人の自覚を
持つて、皆と仲良く健
康で仕事を頑張ってく
ださいとメッセージを



て今まで来ることが出
来ました」と語られま
した。いぶきにきて幸せ
だと言ってくださり、私



ム作り頑張ります」、藤
掛さんは「素敵な女性
目指して頑張ります」
と元気よく述べてくれ
ました。
最後に、ご両親から
あいさつを頂きました。
二十年を振り返りなが
ら「いろいろな悩んだこ
ともあったけど、人に恵ま
れ多くの方に支えられ



第二いぶき
今尾美穂

も胸いっぱいにな
りました。
矢川さん、藤
掛さん、本当
におめでとうござ
います。これか
らみんなと助
け合い、楽しく
笑顔の絶えない
日々を送って
いきましょう。



シリーズ

私と息子と

いぶきと



大竹家の第一子誕生を、大きな病院が安心と思い、県病院での出産を決め、私は立ち会いました。へその緒が首に絡んでいたためなかなか生まれず、頭蓋内出血をおこし仮死状態になりました。「二三日が山場です」と医師に告げられ、嫁に伝えることがとても辛かったこと

を覚えています。最悪の事態は避けられましたが、脳性麻痺の重い障害を持つて生まれた亮輔です。

亮輔が生まれるまでの私たちは、障害者のことを何も知らず、無関心で、障害者に会つても、ただ不思議そうに見ているだけでした。亮輔を連れてみると、以前の私のように見てくる人がいま



す。あまり感じのいいものではありません。健常者が障害者を理解し支え共に生きていく社会になることを願います。

亮輔を授かったことで、私も家族も障害者のことを思いやる幅広い視野を持つことができました。成長させてもらいました。亮輔は現在 28歳ですが、言葉もなく、立つことも歩くこともできません。自分の気持ちを体全体で教えてくれます。欲しいものがあれば、手差しで教え、嫌なことが有

れば大きな声を出して体をそらします。いたずらが好きでテーブルの上の物を落として笑ったり、慣れた人には親しみを込めてパンチやキックしたり、テレビのバラエ



ティー番組を観て大笑いします。私が「寝るからおいで」と声をかけると、笑顔で一生懸命布団まで這つて来ます。そんな亮輔がとても愛しいです。

亮輔が日々頑張っているさまを見ていると、この子の為にも元気な体を保ち「この子より先に死なないぞ！まだまだ

これから20年30年、長生きしよう！」と思う今日この頃です。

毎日元気にいぶきに通り、職員方と仲間に囲まれて、家では味わえない経験と人とのつながりを持たせてもらいとても感謝しています。わがままなところもありますが、亮輔のことをこれからもよろしくお願いします。



いぶきを支える人

岐阜大学地域科学部教授

野原 仁

私は、大学でジャーナリズム論を教えています。が、昨年7月に神奈川県相模原市の障害者福祉施設で起きた、痛ましい大量殺人事件に関する報道には、今でも強い怒りを感じています。

その理由の一つは、容疑者の男が優生学思想の持ち主であり、ナチスドイツのT4作戦(※障害者の大量虐殺事件)をまねた犯行であるにもかかわらず、そう

した指摘が非常に少なかったことです。また、優生学思想が、現在の日本社会に蔓延していることとの関係についての掘り下げた論説も数えるほどしかありませんでした。

もう一つは、犯行前に容疑者が措置入院をしていたことの報道の仕方についてです。事実として報道はするべきですが、その報じ方については、「精神障害者」犯罪をおこす可能性が高い

危険な人物」と捉えられないよう、慎重に配慮しなければなりません。しかし、残念ながら、そうした配慮が感じられない報道が多かったと思います。

また、怒りではなく、改めて考えさせられた点もありました。それは、すべてのメディアが、死者19名と負傷者傷26名の方の全員を匿名で報道したことです。障害の有無にかかわらず、犯罪の被害者は、本人や家族の同意が無い限り匿名で報じるべきだと私は考えます。しかし、この事件での報道には違和感を覚えまして、その理由は、通常メディアは犯罪の被害者を実名で報じるのに、今回は匿名だったことに

あります。ここには、「障害者」特別な配慮が必要な健常者とは違う存在」という差別意識はないのでしょうか？また、「特別な配慮」によって匿名にされたすべての犠牲者が、それぞれの人格や人間性を喪失し、単なる記号のような存在になってしまったのではないのでしょうか？

もちろん、「本人や家族の意向を無視してでも実名で報道すべきだ」と主張するわけではありません。重要なのは、障害者が差別されない社会を作っていくために必要な報道の仕方について、いまの社会の現状を踏まえつつ、私たち一人一人が真剣に考え、議論することではないかと思っています。



施設見学会を行いました

3月2日(木)に岐阜県福祉事業所連絡会岐阜ブロック保護者研修会がおこなわれ、いぶき(西部事業部)の見学会を実施しました。岐阜圏域の小規模事業所の利用者家族を中心に20名ほどの方に施設内を見学していただきました。見学後に感想をいただきましたので紹介させていただきます。

○はじめて見学させていただきました。いろいろな仕事がありびっくりしました。グループホームがあるようですが、一度見学したいです。
○販売商品の種類が多いのに驚きました。作ってそれを販売するまでの毎日の努力が大変だと思いました。
○利用者の皆様がいき

いきと活動されているところが見られました。あと製品の展開などの細かいことも聞きしたかったのですが、時間が無くて残念です。ゆめくるん工房だけでなく他のジャムやマドレーヌ、百々染めの工房もぜひ次回に見学の機会を作っていただけたらと思います。

○来所される人たちのことを考えたいぶきさんの取り組みは素晴らしいなと思いました。アドバイザーを迎えての商品開発など常に次を目指す姿勢は私達も見習いたいと思いました。

○生活介護とA型が連携してかりんとう作りをしていることがわかり良かった。重度の利用者ができる羊毛フェルトの見学ができて良かった。
○いぶき福祉会での様子

を知ることができて良かったです。障がいに応じることができると思いますが、上手に運営しているのすごいと思います。重度の利用者に対して何ができるか、どのようにしていくのか、決めるのは難しいと思いますが、どのよう

にしているのか教えてください。

○職員の方、大変ご苦労さんです。皆さん、とてもやさしくとてもいい空気でした。

○新商品づくりなどに対する職員の皆様の意識の高さにとても感心しました。

○次から次へと事業所を開所され、以前のいぶきさんとはまったく違っていて素晴らしいと思います。職員さんのアイデア、発想に頭が下がります。

いぶき福祉会

後援会総会と

学習会のお知らせ

平素はいぶき福祉会の活動にご理解とご支援を賜わり、厚く御礼申し上げます。さて、平成29年度後援会総会及び学習会を左記の通り開催いたします。

ご多用の折とは存じますが、万障お繰り合わせの上、是非ともご出席くださいますようお願い申し上げます。

日時 7月2日(日)

●後援会総会

午前9時30分～10時10分

●学習会(詳しくは同封のチラシをご覧ください)

午前10時20分～12時

場所

メディアコスモス1F
かんがえるスタジオ
岐阜市司町40番地5

いぶき 仲間のすがた

中島大和さん

いぶき 小笠原一喜



中島大和さんは、人と関わるのが大好きな21歳の男性で、いぶき3年目になります。私も社会人として働き始めて3年目の同期です。初めて担当させてもらった活動グループが中島さんとの出会いです。二人とも社会にでるのが初めてだったので、不安がいつぱいのスタートとなりました。当初は慣れない環境か

ら不安が強うつむきがちで、また不安で自分を見てほしい思いからパニックで気持ちを表現しようとするが多く、自傷や他害が絶えない毎日でした。お母さんとノートや電話でやりとりしながら、中島さんの安心した生活を目指しました。パニックになると、手で頭を叩いたり、机や床に打ち付けて内出血で腫れたり、周りの人をひつかいたり噛みついたりなどして

いました。パニックの対応として、学校時代から学校でも自宅でも身体や頭を押さえて、中島さんが落ち着くのを待つことしかできず、力の強い中島さんの対応には男性が中心となり支援をしました。私がいぶきの活動中傍にすることが多く、心をよせてくれるようになってきました。しかし、私が隣を離れたら他の仲間と関わったりするとパニックになることが増えました。不安が多い中島さんにとって『一緒に居て欲しい』『もっと僕を見て欲しい』といった願いがあるようでした。『中島さんが落ち着けるにはどうしたらいいのか』そんな思いから、作業室に居場所を作り、中島さんのスペースが出来あがり、その中から中島さんも落ち着けるようになっていきました。

それでもまだ、お互いの安全のためにパニック対応では、手や頭を押さえて落ち着くまで様子を見ていく支援しかできていませんでした。『このままでいいのだろうか』という思いが出るようになりました。身体を押さえるとパニックが激しくなったため、見守りと言葉のやりとりの支援を試しました。しかし、パニックしながら私に近寄り手を自分に持つていき『止めて欲しい』アピールをすることがあり、その矛盾を抱えながら、必死に自分の中で消化しようとしているようでした。また『分かってくほしい』思いも強くあるものの、上手く伝えられずパニックで気持ちを表現しているようでした。

二年目になり環境へ慣れてきたのか、私との活動を中心に散歩や音楽療法などで他の職員と関われるようになってきました。そういった日常で心ゆとりができてくることで、パニックが減ってきました。パニックに入ってしまったも、不安な気持ちを受け止め、職員が問いかけるように「寂しかったのかな？」や「部屋暑かったの？」といった言葉かけを行っていく支援をしました。そうすると、中島さんも職員の言葉かけに対して辛そうに返事を返すようになり、言葉をよく聞いてやりとりをしようとしている、そんな様子が見られました。その後も、何かできたときに一緒に喜べる雰囲気作りを大切にしてきました。

今では、うつむきがなくなった顔をよくあげるようになり、目も職員としっかり



り合うことで、目線と言葉かけでより思いが共有しやすくなりました。仕事にもやりたい思いが出始め、本人なりに頑張つて手をのばしてみたり、中島さんから机の前に座つたり、参加しようとする思いが行動に出て来ている様子が見られています。生活にも少しずつ変化が見られており、不安感を感じながらも、私を含む部屋の職員と一緒に色々な場面や活動に挑戦しようとする力が出てきているようでした。

私はこの3年間を振り返り、中島さんとの関わりの中で仲間と一緒に一喜一憂する時間の大切さを教えてもらいました。中島さんのイライラにあわせて私もイライラして、パニックを止める時強く押さえてしまうこともありましたが、しかし、そんな関わりの中から感情のままの支援の危うさがわかったり、仲間の辛さに気付いたり学ぶことも多かったです。



思いや生活の上で大きく変わった中島さんですが、人が大好きなところに加えて色々な活動に挑戦できる強さが出てきてたくましくなっているのではと感じられました。

仲間のすがたを 読んで

いぶき 森山めぐみ

午後の時間、3階の職員室のドアを開けて中島さんが入ってきます。「一人？」と思うと後ろから職員が見守ります。中に入ると、自分から洗濯機のふたを開けます。そして洗い終わった給食のエプロンを取って出し、職員の持つバケツに入れます。タオルが出てくるとちよつと振つてみたりしますが、職員に促されてバケツに入れ、そのバケツをぶら下げて帰っていきます。やらされているというよりも、彼の役割として「僕の仕事」としてやっているように見えます。満面の笑顔です。

このことはすごいことだと心が震えます。入所当時、2階へ上がったたり降りたりするだけで途中止まってしまいパニックになっていたいました。好きなCDの好きな曲をずっと聞きたいと職員の指をデッキに近づけて要求し、聞き入れられないとパニックになりました。靴も履き替えてもらうのを待つていました。好きなことしかやらなかった彼が、



部屋の中の役割を果たしているのです。

二ツクの繰り返しに、いらついた時もありました。入所当初、歩いて散歩するとパニックをおこすために、車いすで散歩していましたが、二人の信頼関係ができるにつれて、歩いて散歩できるようになりました。顔も上がって笑顔です。そして小笠原さんだけでなく、他の人とも散歩することができるようになりました。

小笠原さんとの関係ができたことで、女性のパートさんとも一緒に散歩したりご飯を食べたりできる関係へと広がっています。そして、支援の間がすこし違つ多くの人のやり取りの中で、どんな新たな力を身につけて行っているかと彼の笑顔を見るたびにうれしく思っています。

小笠原さんも中島さんも頑張つたと思います。



座談会

※今回は4回シリーズの1回目です。

福祉の仕事とは①

出席者

池田：(いぶき施設長 勤務年数7年8カ月)

森：(第二いぶき施設長 勤務年数18年)

竹内：(司会・理事)

浅野：(第二いぶき職員 勤務年数6年)

小笠原：(いぶき職員 勤務年数3年)

加藤：(ゆめくるん工房職員 勤務年数4年)

河波：(第二いぶき職員 勤務年数2年6カ月)



竹内：今回は、福祉の仕事と
言うか、福祉労働とは何か
ということを中心に進めた
と思っています。司会をや

りながら皆さんの話を聞こ
うと思っています、理事の竹内
です。

レジュメの1番2番の基本

1. 福祉労働における専門性：技術・技法との関連も
2. コミュニケーション労働としての福祉労働：対要支援者、
対同僚・上司等
3. 感情労働の比率が大きい福祉労働：感情労働における専門性
4. 深層「演技」と表層「演技」の双方を含むものとしての福祉労働
5. 私的(自己)感情と公的(仕事における)感情との関係
6. 現場労働と管理労働
7. 市場志向の労働と非市場志向の労働、両者の関係
8. 福祉労働における様々な共同性
9. 制度に関わる福祉労働と日々の日常実践としての福祉労働
10. 要支援者との関わりと親などとの関わりとの異同と福祉労働

的なことは、福祉労働
の専門性ということ
になるかと思っています。
簡単に言うと、福祉の
仕事は家事の延長上、
いやもと嫌な言い方
をすると、誰でもでき
る仕事みたいに思わ
れかねないところが、
残念ながら世間一般
にはありませんね。し
かし、福祉の仕事はや
り専門性が必要とさ
れる仕事です。にもか
かわらず、その専門性
が世間からはあまり
高く評価されない。い

ぶきでは、福祉の専門性は
かなり大切にはされている
と思っていますが、社会的評
価が低いという話はどうし
ても否定できない、これをど
うしていくか、ということ
は、いろんな意味でとても大
切だと思っています。3、4
番目は、社会学なんかの分
野ではちよつと前から言わ
れている、感情労働という
話です。要するに、人を相手
にする仕事では、必ずこの感
情という面がありますが、
福祉労働の場合もかなり重
要で考えなくてはならない
点だと思っています。典型的な
変な例を出すと、マクドナ
ルドのスタッフの笑顔ってあ
りますよね。あれはちゃんと
マニュアルに書いてあつて、
その通りにやれと。「こう言
うやりかたで、こう言う挨拶
しろ」と。それは逆に言う
と、自分の本心ではなくて、
本当の気持ち、感情はどこ
かに置いておいてというか、
抑えて表情をつくる。これは
ちよつとひどい言い方だけ
ど、そういう感情という要
素が障害をもった仲間を相
手にする時にもあるでしょ
う。例えば自分の感情のま

まに動くことができない場合
も多々あると思います。

コミュニケーション労働とか、
そういう対人関係を大事に
する仕事では、その感情をど
う持っていたらいいか。言い
方を変えると、感情抜きで、
全く技術的な仕事みたいに福
祉の現場の仕事を考えちゃう
と、本当の意味で仲間寄り
添うというふうには絶対にな
らないでしょう。けれども逆に
仲間寄り添い過ぎて、入り
込んでしまうと、今度は自分
の本心と言うか、もともと
持った感情や気持ちが悪化さ
れおかしくなりかねません
ね。そこをどうするかという
ことも考えるべきだと思うの
です。

6、8番目は、福祉基礎構
造改革とか言われている自立
支援法などの福祉の現場を
左右する法制度の改革に関
わつて、福祉現場でも市場
(マーケット)で売れる物をた
くさんつくつて頑張るましよ
う、というようなことではない
か、という問題です。社会保
障と言うか社会福祉の現場は
簡単に言うと、みなさんの給
料の大半もそうだけど、税金
で支えられているわけでしょ

う。これに対して、その他の
社会というのは、だいたい商
品生産とそれの市場での交
換・取引で動いているわけだ
から、そうしたことと福祉や
社会保障との違いを、どの
ように捉えておくか、という
ことも大事な論点だと思う
のです。

すこし堅い話から入りす
ぎましたので、最初は、自分
の仕事の専門性というか、プ
ロとしての取り組みや自覚
と言うか、そういうことから
ざつぱらんに話し始めて
もらえれば…。いぶきに入
る時はどうだったのかと
か…。

池田：普通に考えて、若い職
員の中でも、勤続年数の長い
順からしゃべつていかなくち
やいけないでしょうから、浅
野さん、どうですか？

浅野：えーそうなんですか。
専門性についてということが
言えればいいんですが、いぶ
きに入つて一年目は、ほほえ
みの部屋で働かせていただい
ていたのですけど、その時は
身体に障害がある方の支援
が多かったの、立つときに
前に手を引きながらとか、歩
く時、食べる時にはこんなと

ここに気をつけないといけないなど先輩職員さんから教えてもらいながら身に付けていったのと、それと同時に言葉が喋れない仲間に対してどうやってコミュニケーションをとっていくのかと言うのも教えてもらいながら、なんとかやってきたなあ、と思っています。

二年目からは製菓の作業所に移りました。今度は、比較的言葉でのコミュニケーションがとれる仲間と関わるようになったんですけど、言葉でコミュニケーションが取れる分、ケンカがあったり、こちらの言いたいことが相手に伝わらなかつたり、逆に仲間が思っていることを汲み取るのが難しかったり、様々あります。それはもう、本当に長い間コミュニケーションをとっていくその中で、ひとりひとりがどういう性格で、どういう考え方を持っていてとか、そういうことを一緒に、生活とか仕事をするながら学んで行きました。その福祉という部分にも、製菓で例えばジャムをつくっていかないといけないので、ジャムの専門性や製菓の部分も、日々勉強しながら仕事をしています。

池田：浅野さんは、もともと福祉とか社会保障といった学校ではなかったよね？

浅野：はい、経済学部で、全く福祉のほうの勉強をしてこなかったの、いぶきに入った最初は、未知の世界でした。

森：なんで、福祉というか、いぶきを選んだの？

浅野：楽しそうだなという感じで。

森：この世界が？

浅野：はい。

森：入ってみてギャップはあったでしょ？

浅野：ギャップはもちろんありました。小学校の時に、特別支援クラスと関わる時があったのですが、その時に関わった人たちは、いぶきの仲間はまた違っていたので、最初はかなり戸惑いました。

池田：身内にそう人がいるという訳ではない？

浅野：いいんです。

池田：小笠原さんは、妹さんが？

小笠原：そうですね。一番下の妹が。

竹内：障害をもっているんですか？

小笠原：はい。脳性麻痺です。

池田：小さい頃からこういう仕

事を意識していたの？

小笠原：自分は意識していたのですが、わりと家族はそんな僕の意識には否定的で、そっちの道に進ませない様に、進ませない様に、という感じで常に言われていました。とりあえず自分は小さい頃から親の苦労とか苦悩というか、そういう姿を見てきたし、僕にあたってくることもありました。当然ですが妹の姿も見えていますし、妹以外の子たちもうちに来るので、いろんな障がい児の子の姿を見て、中学校くらいまでは福祉の仕事には就きたくないなと思っていたのですが、高校生くらいになって、ふっと自分の進路を思った時に、自分のやりたいことって何だろうと改めて考えてみたら、福祉の道に行きたいかなーって漠然と思って。親が駄目って言うのを押し切って、大学も勝手に福祉系の学部で願書を出して、親には後から言って・・・そういう感じで入って行きましね。

森：入ってみて、また家族だった立場と働く立場との違いとか、何か思うことって

あった？

小笠原：そうですね、家族の立場だと、やっぱり一心にその子のことだけを考えて、どれだけ距離感が近くてもいいじゃないですか、家族なので。逆に言えば自分がイラッとした時に虐待の方面だとかも全部近いんですよ。手が出そうになったり。でも実際働いてみると、仕事として自分が認識しているのでそういうのは駄目だし、大学で学んできると、距離感次第では、近すぎると仲間のためにはならない場合もあって・・・なんと言うんですかね、自分の生活の中で障害のある人との関わり方と、仕事での関わり方にはすごいギャップを感じていることと、あと大学で学んできたことと、自分の働いている場所との、この三角形の所でも全部にギャップがあるなど感じています。学んだことでも、「このことはそうだけど、やっぱり人によって違うからここは全然役に立たないわ」と思ったりして・・・答えになっていないのか分からないですが。

池田：河波さんは福祉系の学校？

河波：僕は福祉関係の学校です。

池田：学校での勉強などは役に立っている？

河波：学校を卒業したのはもうだいぶ前なので。

池田：あ、そうでした。

河波：はい。しかし学校で自信持って勉強したとはとても言えないので。なんとか卒業はできましたけれど、そこから福祉の仕事に2年就いたんですけど、辞めちゃったの？

河波：そこも知的障害者の授産施設でした。

森：入所なの？

河波：入所と通所両方ありました。

森：成人のほうをやっていたんだよね？なぜ障害分野を選んだの？

河波：就職活動はけっこうやりましたが、あちこち受けた訳ではなくて、たまたま紹介して下さった飛驒の方に縁があったので。そこで2年勤めて、その後はずっと別の世界で働いていました。

森：何年一般企業で働いていたの？

河波：13年くらい。

森：それでまた戻ってきて？

河波：はい。やっぱり折角福祉の学校を出たし、またチャンスがあるなら、年齢も考えてもう一度この世界で挑戦できれば後悔しないかな、と思いました。あまり深くは考えていなかったけど。

森：さっきの専門性の話になるかどうか分からないけど、一般の企業で働いていたのと、福祉の世界とはやっぱり違うじゃない？何かそこら辺は感じるどころがあったりする？

河波：そうですね。福祉の世界はコミュニケーションが大事ですが、前の仕事はそこまでコミュニケーションを重視しなくても働ける環境だったので、やっぱり人と接する仕事をしたらもつと自分に得るものがあるんじゃないかと思

い始めて……。そのままだったら何ということもない人生が淡々と過ぎていきそうな感じだったです。

森：働きはじめたきつかけって、いろいろあるよね。加藤さんは、なんで保育の学校だったのに道を変えたのだろうとか、聞きたいですね。

加藤：私は、ずっと保育士になりたくて、大学も保育の方に

行っていたのですけど。保育士の資格を取るときの実習で、障害のある方の施設に行くというのが決まりでした。

その時に泊まりで一週間行かせてもらったのですが、すごく楽しかったし、働いている職員の人がすごくいい人達で、楽しそうに仕事をされて

いて、とても印象的でした。少しづつそこから気持ちが変わって、それまでは全く考えたことがなかったのですけど。利用者の人と1日ずつと

過ごして、一緒に仕事をする中で、私の中ですごく楽しい気持ちが大きくなり、こういう道に進んでみたいなというふうに気持ちがガラッと変わって、今のいぶきに就職しました。

森：働いてみてどうか？外からいいなと思っていたのが、自分は今働く立場になっ

たじゃない？何か違う？加藤：嫌だと思ったことは無いですが、色々悩むことはあるけど、でもやっぱり楽しいなという感じでやっていきます、ずっと。

森：僕は上司になるから、なんか言わせている感があるかもしれないね、楽しいなって。

池田：でも、悩むこともあるという、そこを深めることが大切だね。何悩んでいるか、そこを深めないといけないでしょ。

竹内：難しいと思ったら悩んだり、そういうことは無い？加藤：私はここに入って4年間ずっと同じ製菓の部屋を担当させてもらっていて、障

害は軽い方で話しもできる方ばかりなのですけど、さつき浅野さんが言っていたみたいに、話ができるから自分が

言ったことが相手にちゃんと伝わるかというところではないというところがあります。やっぱりそれで最初は私もすごく悩んで、仲間に私はこういう思いで言ったのに、仲間はそれを違う思いに捉えて

しまつて、それで仲間をすごく傷つけてしまったこともありました。自分が伝えたいこ

とも伝え方を考えて相手に伝えないと、違うとり方になつてしまつたり、そこでずれ違つてしまつと、仲間との距離も離れていつてしま

うし……。毎日、しばしばあることなんですけど、私も毎日同じセッションでもないし、仲間も家で何かあったりして、す

ごく嫌な気分であつた日や、すごく良いことがあつて明るく出勤してくる日、本当に毎日

仲間の表情も違つて。朝、仲間の表情とか雰囲気を見て、今日はちよつと元気なのかとか、何かあつたのかという感じを見ながら、今日はちよつといつもとしゃべり方

を変えてみたというのを意識しています。いつも仕事は一生懸命しているつもりですが、本当に思ひのすれ違

いが一番難しいなと思います。竹内：3年目だつて？加藤：4年目になります。竹内：4年目くらいになつて

変わってきたことはどうですか？固く言う福祉技術なんてことになると思うけど、以前だったら仲間の表情から今日はこういう話し方をしようといったことに時間がか

かつたり、しばらく自分の中で悩んだりしていたのが、ちよつと年数を経たしたことによつて、結構早くという

パツとできるようになつたのか、そういうのはある？加藤：そうですね、はい。竹内：僕は、そういうことは結構、技術と言うか、福祉労働の専門性を構成する重要

な要素だと思うのだけれどね。

池田：浅野さんも同じような感じであつて？浅野：例えば、ちよつと違うのですけど。Yさんは他の仲間が冗談言い合つて遊んで

いる時に、自分もその中に関わりたいって、関わろうとするのだけれど仲間が嫌がっちゃつて、そこでケンカになる。森：関わり方が分からなくてね。

浅野：Yさんは、結構、仲間に過剰に関わつてしまふので、そんなこと見ていると、やっぱり仲間同士の距離感が難しいと思います。やり

ぎると嫌なんだと思う仲間もあるよ、ということも伝えているのですけど、なかなか分かつてもらえないですし……。Yさんが、結構他の人の行動が気になつて注意

をしてしまうのですけど、やっぱり注意ばつかりの人だと嫌われちゃうから、相手のいいところを見つけて

誉めると良いんだよ、という事を伝えていても、そのところは難しく、こつちの言いたい意図が伝わらない

と言うか。そこが結構難しいかなと思います。

竹内：ストレートに意図が伝わらない段階があるとするじゃない。もし伝わる段階がまだできていないとしたら、ちよつと以前よりも伝わる方向に行っているとか、そういう段階を踏んでいる感覚はある？

浅野：いやー段階までは……。
竹内：例えば、言葉だけでそういう注意してもだめな時に、ジェスチャーなんかで少し違うことしてみたり、といったことは？

森：なんか工夫していることあるでしょう？仲間には自分があえて言わずに、仲間どうしの関係に任せて外から見守りながら少しだけそこに入ってみるとか、そういう色んな工夫していたりするよね？

浅野：仲間同士一緒に作業して協力し合う関係ですよ。Yさんは結構手先が器用なのでどうしても一人でやってしまうんですけど、そこを誰かとくっつけて協力しあうて、その中で関係性が良くなれば良いかなとか、は考えてそう仕向けはします。Sさん

はYさんが苦手なのですけど、Yさんはオセロゲームができ、Sさんもオセロゲームが好きなので、唯一できる仲間のYさんに一緒にやってみたりとか。

仲間同士でできる部分というか、関われるところをつくつてあげる感じですね。

森：駄目なところを注意するときに駄目だよと言うのではなくて、何かそれぞれの良いところを認めていくような環境づくりというか、そういうのをすぐくしているのじゃないかなと思う。それでうまくいくことも、いかないこともあるけど、そういう生活の中を整えてあげるといのは、どの部屋でもやっているんじゃないかな、と思う。

竹内：今日はこういう言い方で失敗したとか、こんな表情の時にこういう言い方をしたら、うまくいかなかったけど、次の日にこういうことをやったらちよつと良くなったとか、時間がないから大変かもしれないけど、自分なりに記録しておくで積み重なっていくのだと思うけど。福祉の仕事の専門性が認められるように、ホームヘルパーとかそう

いう人達もそうだけど、せつかくいいこと、大事なことをやっていても外に発信されない場合が多いように思えます。つまり自分の頭の中だけに留めてしまつて。同じ部屋の支援者同士での話しあいなどを積み重ねる努力をして更に発信していく。そういう細かい話になると思うけどね。

そういう記録があると、他の人に伝わりやすい。後で入ってきた人とかにも。それが技術と言うか、技法というか、何か一定のまとまりのあるものとして認められやすくなる気がします。小笠原さんに聞きたいのだけど、何かそういうコミュニケーションで日々の細かいところ「神は細部に宿る」と言われるけど、そういう点はどうか？

小笠原：コミュニケーションの授業と言うのは大学であつたのですが、それは例えば、大まかにこの人が怒っているけど、そのときにどういう対応すればよいとか、そういう大雑把なものだった気がします。

竹内：それじゃ駄目と思う。
小笠原：実際の福祉の現場で、この人怒っているから、大学での教科書と同じように

やったら上手くいくかといったら、それは絶対ないの……。
森：小笠原さんとかなんてね、結構大変だよ。

竹内：障害の重い人のところ？

小笠原：重い人は重いですね。
池田：Kさんよく怒ってるよね。

小笠原：はい。言葉が通じないと言うか、こつちの言葉は分かっているけど伝える手段が無い人たちが多い部屋で、怒っているのは分かるのですけど、何で怒っているのか最初の頃はさっぱり分からなくて。
竹内：今は分かるようになってきた？

小笠原：何となくなんですけど。自分の場合は、最初の1年間はNさんというパニックを持っていてる人にほぼマンツールの状態でつかせてもらっていて、その人に対しての1年目は頑張りました……。その時にパニックの経過みたいなものや、何で怒ったのか気持ちとかを考えながら書くことをやっていて、それはNさんの支援者が特別支援の時代から続けてきた様子をそのままもらってやっていたのです

けど。それも竹内さんが言っていた積み重ねなのですかね。やってくうちに何か月前はこういう行動をしていたから、今回こつちをやってみようかとか、いわばこのパニック表を見せながらだと伝えやすいですし、自分の中に一個一個の支援の在り方を蓄積する方法としても使わせて頂いています。それこそ本当に支援とパニックの積み重ねですね。今では薬が変わってパニックもほとんどない。毎日あつたパニックが零に近い形にかわつてきて、季節柄ということもあるのですが、今はほとんど書いていないパニック表です。

森：あまり無いんだ？
小笠原：無いです。10月、11月くらいは、パニックはゼロですね。

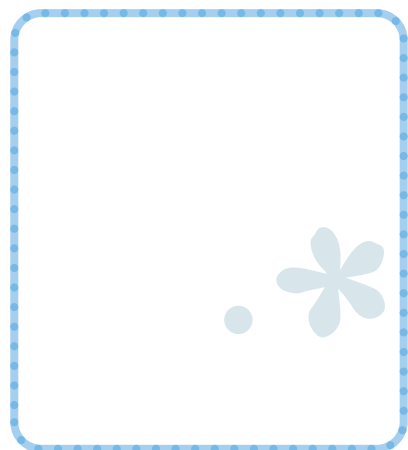
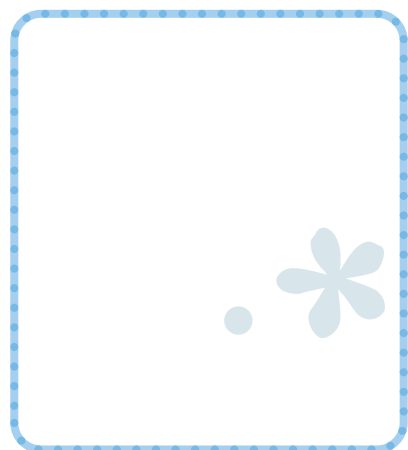
(続く)





いぶき福祉会
平成29年度
新人職員紹介

いぶき福祉会では4月から、6名の職員が加わりました。
皆さんよろしくお願いいたします。



後援会員への新規加入・更新をよろしくお願い致します

[振込先] 郵便振替 00840-3-91146

加入者名 いぶき福祉会後援会

[年会費] 一般会員 一口 2,000円

団体会員 一口 10,000円

[お問い合わせ] いぶき福祉会後援会事務局

TEL 058-233-7445

FAX 058-232-9140

E-Mail ibuki@alto.ocn.ne.jp

(タイトルに後援会員と入れて下さい)



●オンラインでの入金もできるようになりました。

下記のアドレスからご利用いただけます。

いぶき福祉会canpan決済

<http://kessai.canpan.info/org/ibuki/>



後援会への入会はJR岐阜駅の「ねこの約束」でも手続きしていただけます



第26回

いぶきふれあいまつり

この街で心つながり

夢よひろがれ

日時

2017年5月14日(日)

10:00~14:00

場所：島小学校

問い合わせ先

いぶきふれあいまつり実行委員会事務局(いぶき内)

☎058-233-7445 担当：伊藤

主催：いぶきふれあいまつり実行委員会

後援：岐阜市・岐阜市教育委員会・岐阜県社会福祉協議会・岐阜市社会福祉協議会

編集後記

来日外国人が、日本の文化・風習で大変驚いたことのいくつか。

◆小学生の自力登校。特に都会での電車登校風景。◆町にゴミが落ちていないこと。◆朝のラッシュユルでの無言の利用者集団行動。◆コンビニでの笑顔接遇。◆私たちが日ごろ特になにも感じていない日常の暮らしが、グローバルにみるとクール(かつこい)文化なのである。◆平和憲法によって培われてきた、ある種の安心感、または余裕のある空気がもたらした社会風土なのである。◆たわいもない社会ネタが、ニュースのトップで伝えられる、そんな平和な社会が続きますように。

編集長 林守男

